

フランス視察報告 第一報 「Maternité Les Bluets (レブルエ)」

Maternité Les Bluets <http://www.bluets.org/>

認定NPOゆいネット北海道理事長 堀本 江美

平成30年4月フランス視察に行き、視察先の一つに素晴らしい医療施設がありましたのでご報告します。それはパリ市内にあるMaternité Les Bluets(レブルエ)です(写真 レブルエ外観)。民間NPOで経営されている総合女性医療センターです。1947年開設され、分娩年間3000件です。全ての分娩室に分娩用のベッドの他にジャグジーがあり、陣痛はお湯の中で過ごして好きなように分娩し、助産師が対応し、医師はタッチしません(写真2分娩室)。異常無ければ日帰り、帝王切開になった場合はもちろん医師が担当し、5日間で退院します。帝王切開率は14%で、フランス全土では18%なので大変優秀な病院です。



レブルエは1970年代に女性医療に特化し、婦人科手術、体外受精、医学的中絶を行っています。この病院の大きな特徴は、公立病院であるトルソー病院の建物とレブルエの建物が隣接ではなく、合体している事です。このような施設は日本にはありませんから大変驚きました。レブルエはレベル1の民間病院で、緊急時にはレベル3の公的な拠点病院であるトルソー病院にストレッチャーですぐに転送できる仕組みになっています。これを知った時点でこの病院で働きたい!と思いました。産婦人科医にとって母体搬送が一番の悩みだからです。(札幌にもこのような施設があればどんなに働き易いでしょうか。)

更に、すぐ隣に自然分娩のみを扱うバースハウス、Comme a la maison(コムアラメゾン;直訳はおうちみたいに)が併設されていました。胎児モニタリングすら行うことなく1対1でひとりの助産師が交代なく付き切りで分娩介助する施設です。助産師6名で運営されています。この施設を利用出来る妊婦は次の条件をクリアしなければなりません。多胎ではないこと、骨盤位ではない事、血糖の異常がないこと、既往歴が無く高血圧など妊娠経過に異常がないことが条件です。

夫は立ち合い可能ですが、上の子どもは立ち会うことが出来ません。2017年には117人が産まれました。お産のお部屋には畳が敷かれているものもありましたし、竹で出来た家具もあり、日本の影響も感じました。この施設の入口で靴を脱ぐのにも驚きました、フランスでは手術室ですら靴は脱がずに滅菌カバーを装着して行っているのに。分娩後はわずか6時間から12時間で帰宅します。イギリスのキャサリン妃が入院当日の午前中に出産し、同じ日の夕方に退院したことが日本で話題になっていましたが、健康な女性であれば普通のことのようです。

レブルエには日本には無い家族計画外来があります。医師だけでなく様々な専門家が揃っていることでフランス国内でも有名なモデル病院です(写真3 意見交換風景)。ここでフランスと日本の違いを少しお伝えすると、ザックリした数字ですが、フランスは年間およそ80万人が生まれ、年間20万人が中絶するのに対し、日本では100万人弱が生まれ、16万人中絶します。避妊方法をみると、フランスはピル40%避妊リング25%、日本は80%が男性用コンドーム使用ですから、性に関する状況は大きく違います。



次に、様々な専門家の業務をご紹介します。

コンセイエコングルエファミリアル Mrs. Bazile

子どもや女性から様々な相談を受け、その相談を他の専門家に連携、さらに青少年や若いカップルに性に関する教育、避妊法の選択の相談などを行います。国家資格ではなく、国家認定資格で、3年間勉強して取得する資格です。1年目は相談対応について学び、2、3年目には結婚生活や家族形態、子どもについて思春期の特性など多くを学びます。医学ではなく社会学が専門領域です。相談者が局所麻酔で行う外科手術の中絶を受ける場合は手術にも立ち会います。ご勤務されているマリーロバジルさんは、トルソー病院とレブルエの両方で家族計画外来を担当しています。

家族計画外来の秘書 ティファニー Mrs. Daufresco

電話での問い合わせや受付を担当します。女性がドアを叩くときに最初の窓口が彼女です。医師から大変有能であると紹介を受けました。問い合わせがあれば彼女が女性に最終月経を尋ねて薬剤誘導性人工中絶が適応か、外科的な手術が必要か判断して予約を振り分けます。秘書は協会の認定資格です。特別な研修を受け、1週間ごとにテーマがあり1年間教育を受けます。

心理療法士 エロディー Mrs. Fletcher

性暴力被害の相談や人工中絶に踏み切るかの悩みを受けます。夫婦間レイプについての相談も受けます。(フランス刑法では夫婦間のレイプはその他よりも罪が重いとされているそうです。)この施設に警察官はいません。性暴力被害者の場合は性暴力被害対応の協会に連絡や紹介をします。本人の同意があれば警察に届けます。18歳未満の場合には同意が無くても警察に届け出をします。2001年からフランスでは18歳未満でも親の同意は不要で本人の希望のみで中絶が受けられます。

婦人科医 クリスチヌ Dr. Fagot

薬剤誘導中絶や麻酔下の中絶外科手術を行っています。この病院の仲間は運動家ミディタンの思想を持っています。フランスでは本人希望なら14週まで可能で医学的な理由があれば制限無し、日本では22週未満までの中絶が認められています。フランスでは中絶の64%が経口薬で行われており36%が薬剤誘導性の外科手術です。一方日本では薬剤誘導無しの外科手術が100%行われています。

また、家族計画外来とは別、助産師のみが診察を行う診察室の設置がありました。医師の外来とは別に設置され、専門は思春期の性教育です。医師の診察無しで、助産師の権限で妊娠7週まで中絶薬の処方出来ます。フランスでは助産師になるには5年間学びます。1年間は医学、残り4年間は助産師教育を受けます。薬剤処方だけでなく、子宮内避妊リングの装着も行ふことが出来ます。

日本では緊急避妊ピルの薬局販売すら認められていません。現在は世界65か国で使用されている中絶薬ですが日本では治験も中止されている状況です。月経が遅れて2、3週間以内の時期なら助産師外来で処方された薬を服用すれば月経のように出血し妊娠を早期に中断できます。日本では外科手術をするしかありません。なんという違いでしょうか。

最後に、Dr. Danielle HASSOUNがこんなことを言っていました。

「とてもeasyな印象を受けたかもしれませんが、カトリックにおける中絶は大変なことです。レブルエは女性がまた立ち直る事が出来るように手助けをするセンターです。アメリカでは中絶センターに対する風当たりが強く、センター前に座り込みをする人たちもいますし、医師が殺されることもあります。フランスでは今は自由に女性が自分の意思で中絶を決められますが、時代によって変化するからこれからどうなるかは分かりません。」(写真4 ダニエラアスワン医師と記念撮影)

